

巻頭言

持続的 社会のイメージ

都筑 建

(ワーカーズコープ
エコテック)

自分も参加できることを望み、現状の変革の上に描く近未来を考えると、
「持続的」というキーワードは最優先的課題となりつつある。特に大都会の中
で、少々不満はあっても、満ち足りた快適な生活を享受している人々にとって
それが快適であればあるほど、一抹の不安がスーッと心の片隅を横切ることが
益々多くなっている。

「地球環境破壊」の危機的現実が単に物理的な様相を示すだけでなく、政治
・経済・文化の全てに深く関わり、日を経るほどにその危険度は減少するど
ころか深く、誰の目にも明らかになってきた。変革すべき社会を一度「エネルギ
ー」又は「エントロピー」の切り口で割って、切り取ってみると、混沌とした
現実が少し整理されて見えてくる。「エネルギー」や「エントロピー」は我々
が享受している生活の根幹を映し出す指標だから。現在のエネルギー大系を一
言で表現すれば、一極集中大都市文明を支える大規模集中型発電の多消費型エ
ネルギーシステムといえる。

地球の観点から見れば、日本列島自体は周囲の暗黒の中で白く輝くエネルギ
ーの特異点である。大都市の住民は自分の活動の手段のエネルギーを自分で作
らない。代表的例として日本の原子力発電所を考えてみると必ず過疎地に巨大
な建造物（ハコ）を建て、長い高い送電線で白く輝く大都市へ送られる。それ
だけに終わらず、危険な原発を押しつけるため、不相応な多額の金をばらまき、
地域社会をズタズタに破壊してしまう。発展途上国からは資源を巨大なタンカ
ーや輸送手段でかき集めて大都市の日本列島に運び込んでいる。格差が開くば
かりである。どんなにみても不自然である。

日本人の一人一人の必要なエネルギー量はその欲望に合わせて増大するば
かりである。それは全て「効率」という尺度で決められている。もう「効率」と
いう古い絶対的宣託はパンドラの箱に戻す時期にきている。これに替わるキ
ーワードを「持続的」としてはどうだろう。しかしこれには、必ず「小規模」「分
散型」そして「協同」を伴うことが条件であろう。一つ一つを具体化すると自
ずと「持続的社會」のイメージが定まってくる。これらのフレーズは全て中央
集権と対極のものである。自分で必要なエネルギーは巨大な電力会社に任せ
ないで、自分の手の届くところで作るという原則を確立しただけでも地球破壊は
改善される。個人より協同で作るとした方がより現実的だろう。

効率で律される市場でなく、環境負荷を内部化した「オルタナティブ市場」
の形成をどうつくるか。それは大局を一気に変える方策でなく、個々の一つ
一つの試みの積み重ねと横の広がりから始まるのだろう。例えば、個人住宅の屋根
の上で太陽光発電システムが動き、その屋根から流れ落ちた雨水でトイレや風
呂や散水の水が補水されることなど。この時、モウカル（効率的）かでなく、
CO₂や放射能を出さないソフトエネルギーへ自らの意志で身銭を切って設置
する意識を持てるかにかかっている。

CO₂排出量の多いエネルギー源（石油・石炭など）にはそれに見合った課
徴金を、さらに交通渋滞の激しい高速道路は高料金を徴収するなど、これまで
とは違う発想のイメージ（緑の料金）に真剣に取り組むことが要求されている。